

麻布大学ティーチング・ポートフォリオ

所属 動物応用科学科

職階 准教授

氏名 永澤美保

麻布大学では、教育研究活動その他大学の諸活動を恒常的に自己点検・評価し、その結果を検証して改善に結び付けることにより、教育の質保証を行う観点から、各教員が『ティーチング・ポートフォリオ』を作成しています。ティーチング・ポートフォリオの構成及び更新サイクルは以下のとおりです。

1. 教育の責任・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3 年
2. 教育の理念・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3 年
3. 教育の方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3 年
4. 教育の方法の改善・向上を図る取組・・・・・・・・・・ 毎年
5. 学生の授業評価アンケート結果に基づく改善・向上の取組・・ 毎年
6. 学生の学修成果向上を図る取組・・・・・・・・・・ 毎年
7. 指導力向上のための取組・・・・・・・・・・ 3 年
8. 今後の目標・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3 年

1. 教育の責任

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2024年2月

動物人間関係学：動物人間関係学は、動物応用科学全般の基盤ともいえるべき学問である。イヌなどの伴侶動物やヒトの生活を支える家畜動物、それら動物たちとヒトとの関わり方について歴史的背景とともに理解できるように工夫している。さらにその動物種ごとの生理的ならびに行動的特性を学習し、適切な動物との関係性のあり方について考察できるように学生に自主的に学んでもらうよう努めている。自分事として学びを理解してもらうために、学生自身が体験した動物とのエピソードを事前に提出してもらい、それをもとにした授業内容を組んだ。

介在動物論：ヒトと動物の共生は互恵的関係を構築しており、この一端が、医療場面などにも活かされつつある。ヒト医療場面における動物介在療法の利用対象となる個々の疾患の概要およびその治療法と介入方法の例について理解を深めてもらうことを目的としている。さらに最新の論文を読み解くことで、「なぜ効果があるのか」の議論の道筋を見出すための知識を身につけ、今後のヒトと動物の共生への考察を促している。今年度は、統計資料を読み解くことで、動物介在活動・療法の求められる現代社会の状況を理解できるよう工夫した。

動物介在活動・療法演習：動物介在介入の対象者の立場として動物との実体験を通して効果を実感してもらう。それと並行して、先行論文を検索し、自分自身がなぜ効果があると感じたのかを客観的な手法をもって示す方法を身に付けてもらう。今年度は実験計画を立て、自分自身の心拍を測定し、乗馬時と運動時の自律神経活性の違いを解析し考察をしてもらった。特にグラフの作成等、データを可視化することの重要性を理解できるよう工夫した。

乗馬応用実習：乗馬の実体験を介した心身への影響を測定し、その解析方法と効果を測る科学的手法を身につける。決して技術論に落ちず、データサイエンスの素質をもって、ヒトと動物の関係性を明らかにする仕組みをいれる。今年度も新型コロナの影響により通常よりも少ない回数で保育園児の乗馬プログラムを実施したが、学生にとっては少ない回数ながらも真剣に取り組む機会が得られたと感じている。

科目名	学科・専攻	単位種別	配当年次	受講者数(単位:人)
動物応用科学概論	動物応用科学科	必修	1	140
動物人間共生論	動物応用科学科	必修	1	140
動物応用科学実習	動物応用科学科	必修	1	140
基礎ゼミ	動物応用科学科	必修	1	140
動物人間関係学	動物応用科学科	必修	2	140
介在動物論	動物応用科学科	選択	3	60
動物介在活動・療法演習	動物応用科学科	選択	3	30
乗馬応用実習	動物応用科学科	選択	3	30
専門ゼミ	動物応用科学科	必修	3	1
科学の伝達	動物応用科学科	選択	4	3
卒論	動物応用科学科	必修	4	3
人と動物の関係学	獣医保健看護学科	必修	1	70
動物人間関係学特論I	動物応用科学専攻（博士前期課程）		1,2	
動物人間関係学特論II	動物応用科学専攻（博士前期課程）		1,2	
動物観比較文化特論	動物応用科学専攻（博士前期課程）		1,2	
動物介在療法特論	動物応用科学専攻（博士前期課程）		1,2	
動物共生科学特別演習 III-I	動物応用科学専攻（博士前期課程）		1	
動物共生科学特別研究 III-I	動物応用科学専攻（博士前期課程）		1	
動物共生科学特別演習 III-II	動物応用科学専攻（博士前期課程）		2	
動物共生科学特別研究 III-II	動物応用科学専攻（博士前期課程）		2	
動物応用科学特別演習 VIII-I	動物応用科学専攻（博士後期課程）		1	
動物応用科学特別研究 VIII-I	動物応用科学専攻（博士後期課程）		1	
動物応用科学特別演習 VIII-II	動物応用科学専攻（博士後期課程）		2	
動物応用科学特別研究 VIII-II	動物応用科学専攻（博士後期課程）		2	
動物応用科学特別研究 VIII-III	動物応用科学専攻（博士後期課程）		3	

2. 教育の理念

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2024年2月

基本的には、「学生の学問に対する興味を高める」「減点方式ではなく加算方式を取り入れて、アクティブラーニング的要素を取り入れる」「双方向性を重要視し、授業中に学生に対する質問を多く投げかける」「成果物の良いものを例として出し、欠点指摘ではなく、優秀点の評価型とする」を通して、学生が自主的に学び、自分の興味を追求できるようにする。その中で、データサイエンスやサイエンスリテラシーが次第に身につくように工夫する。これを通して、答えのない実社会で、臨機応変に対応して、自主的に作業し、成果をだせるような人材育成を目指す。担当科目については「ヒトと動物の共生」について、表面的な理解ではなく、他の動物の行動や生命を自在に扱うことができってしまう人間としての葛藤を感じ、そのうえで自分自身の答えを見出そうとする経験を通して、新たなヒトと動物の共生を考えてもらうことを意識している。

3. 教育の方法

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2024年2月

ヒトと動物の関係に関する固定概念を壊すことから始めている。歴史的な経緯や文化による違い、一般的に美談として扱われていることの裏側等、様々な視点からヒトと動物の関係を見直すきっかけをつくり、そのうえで、生物学的な知識を持つことによって、科学的な態度で考える機会を多く設けることに努めている。学生の学問に対する興味を高めるために、時事ネタや学生自身の経験に基づいた動物との関係を講義に盛り込むことを意識している。また、双方向性をあげるために、なるべく異なる多くの学生の課題を取り上げて、毎時間に紹介するようにしている。

(1) アクティブ・ラーニングについての取組

有

学生自身が課題に対して調査し、課題を提出するなど、多くの座学科目でアクティブラーニングを取り入れている。実習においても、技術習得に加え、課題や目的を設定させ、その目的から、理論仮説、作業仮説の設定、データの解析、考察を自らが実施しており、深いアクティブラーニングが実施できている。

(2) ICTの教育活用

有

授業中に出す課題に関しては、その場で提出を求めているため、すべての学生がPCを用いて参加することになる。コロナ後は締切日を延長しているが、提出課題は学理やGoogle Formの活用で随時確認している。また実習においても、データシェアリング、解析の共有、スライド発表もすべてオンラインでできるように指導し、ICTはフル活用している。逆にICTを使わない授業、実習はやっていない。

4. 教育の方法の改善・向上を図る取組

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2025年2月

(1) 教育（授業及び実習等）の創意工夫

A

学生の身近な例を題材に取り上げつつ、最新の研究成果や知見を伝えることで、学生の多様な興味・関心に対応できるよう工夫している。

(2) 学生の理解度の把握

B

毎回、簡単なレポートを課し、評価している。

(3) 学生の自学自習を促す工夫

A

関心を持ち、より知識を得たい学生のために、授業スライドから資料を閲覧できるようリンクを貼るなど対応している。

(4) 学生とのコミュニケーション

B

授業中に質問しづらくても、個別に質問してもよいと常に伝えている。質問があった場合は、次回の授業で説明をすることで、質問しやすい雰囲気を作る。

(5) 双方向授業への工夫

A

課題へのフィードバックを行う。

5. 学生の授業評価アンケート結果に基づく改善・向上の取組

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2025年2月

（１）授業評価アンケート結果の授業への反映

難しい単語は、平易な言葉で再度説明した。不明な点がないか、都度学生に意見を求めるようにした。困難な点は、具体例を上げることで、学生の理解を促した。

（２）（１）の結果による改善・向上の具体的な成果又は課題

一部の学生には効果があったが、効果のない学生もいた。

（３）（２）を踏まえた次年度の取組

初年次教育におけるアクティブラーニングの姿勢を身につける全学的な取り組みが無い限り難しい。効率的な教育体制の充実化を期待する。

6. 学生の学修成果向上を図る取組

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2025年2月

（１）現在までの学生の成績向上に資する取組及びその成果並びに今後予定している取組

課題に対するポイントの説明、データサイエンスにおけるデータの扱いなどを、説明し、サイエンスリテラシーの向上を目指している。いくつかの科目では、小論文課題を複数回提出させている。毎回の提出後、文章構成や書き方など、ポイントを説明。優秀な課題や新たな気づきにつながる課題に関しては、実名をあげて紹介している。

(2) (1) の取組を通じて改善・向上が図られた学生の学修成果並びに当該取組
に対して得られた学生及び第三者からの評価又はフィードバック

特になし。

7. 指導力向上のための取組（FD研修参加等）

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2024年2月

オンラインで参加し、教育理念の構築の重要性がわかった。この概念形成をもとに、教育構成を再考している段階にある。

8. 今後の目標

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2024年2月

短期的には、課題の抽出（なぜ？と考える）、それに対する自分なりの答えを表現する機会を設けることで、自分自身の言葉で説明ができるようにする。長期的にはサイエンスリテラシーとコンピテンシーの向上を目指す。